

二〇三三年一〇月一三日

藤袴育て蝶呼ぶ村おこし
紅白の花差し交はす水引草
摩天楼ビル抽んでし秋の空
巨峰ひとつ口にふふみて吾至福
飛石に庭下駄すべる寒露かな
岩肌に水陽炎や庭小春
天高く旗翳しゆく添乗員

二〇三三年一〇月一二日

寝袋の中で寝返りちちろ鳴く
宇陀越へてより猪垣のつづく道
風の道釣鐘人參揺れやまず
秋澄むや利き水甘き伊丹郷
路地さやか焼杉壁の蔵ならぶ
住職も银杏剥きの座に和む

二〇三三年一〇月二一日

露の玉むすぶ芝生に朝日燦
剪定の手順たがはぬ高梯子
街のビルすべて呑みこむ大西日

二〇三三年一〇月二〇日

三代の三幅対や文字涼し
白壁に映えて古木の柿たわわ
破蓮の立ち尽くすもの果つるもの
鰐口を鳴らし寺苑の秋惜しむ
三川の落合ひ激つ水の秋

うつぎ

こすもす

康子

素秀

なつき

康子

もとこ

豊実

明日香

むべ

うつぎ

せいじ

はく子

むべ

澄子

みきお

せいじ

ぽんこ

たか子

たか子

明日香

二〇三三年一〇月九日

長き夜の枕辺に置く句帳かな
母の味探りながらの芋茎和え
赤蕎麦の花絨毯や能勢棚田
あたたかや汀子に宛てし虚子の文
潦小突きやまざる蜻蛉かな

二〇三三年一〇月八日

秋時雨寄り添ふ鳩の含み声
波止釣りの百竿鬨ぐ秋日和

二〇三三年一〇月七日

匙を手に乗をほじくるとき寡黙
禅の碑の喝と読めたる蔦紅葉
廊下行く口笛はジャズ夜学生
鬼瓦虜にしたる蔦紅葉

満天

もとこ

うつぎ

せいじ

澄子

智恵子

千鶴

かえる

うつぎ

素秀

あひる

毎日句会みのる選・二〇三三年一〇月一五日